



Jonathan H. GROSSMAN,
Charles Dickens's Networks:
Public Transport and the Novel
 (vii+256 頁, Oxford University Press, 2012 年 3 月)
 ISBN: 9780199644193

(評) 木原泰紀
 Yasuki KIHARA

もし予備知識なしに本書を手に取り、そのラッパーの表を漫然と眺め、*Charles Dickens's Networks: Public Transport and the Novel* というタイトルと添えられている蒸気機関車のイラストレーションから「ディケンズの小説と鉄道を論じたものだろう」と考え、さらに『英国鉄道物語』(小池滋著)が参考になるかな」と書棚にその在り処を探しに行ったとしても(つまり、これは評者の素朴な^{フィード}反応なのだが)、無理からぬところではないだろうか。とは言え、注意不足(と無知)がこの判断に関与していることも勿論否めない。と言うのも、その蒸気機関車の絵をよくよく眺めてみれば、客車の部分が台車の上に載せられた馬車(馬なし)ではないか。つまり、蒸気機関車が馬の代わりに複数のキャリッジを引いているのである。しかもご丁寧に各々のキャリッジの前と後に御者と車掌(ビュゲルを手を持っている)も配されている。この絵はさらに、本書の扉にも、書中にも載せられており、著者の枢要な概念を伝える重要なアイコンなのだろうと察しが付く。正しく然り。著者によれば、これは1823年に出版された鉄道に関する書籍の中の絵で(つまり、1825年に登場した初の蒸気機関車、ジョージ・スティーブンソンの「ロコモーション」号のお披露目以前ということになる)、言わば「未来の乗り物」の想像図なのである(極めて近未来だが)。本書の著者にとって重要なのは、馬車と鉄道が対照ではなく、連続として存在することをこの絵が表象しているという点である。鉄道は馬車に取って代わったのではなく、馬車の高速化を実現させた新しい交通システムの主役を奪い取ったに過ぎないのであり、18世紀から19世紀初期にかけて行われた交通革命(技術的には、主にサスペンション等の馬車の改良と新しい舗装技術による道路網の整備である)によって生まれた新しい交通システムの有り様こそが肝要であるというのが、著者の主張であり、本書に一貫して流れる通奏低音である。そして、著者は、ディケンズの小説世界においても、この交通システムが構造化されていることを、

或いは、この交通ネットワークという下部構造の上に小説世界が構築されていることを論じている。(かくして、本書にはあまり鉄道は言及されておらず、初見の印象は半ば裏切られた形となった次第である。)

本書に取り上げられているディケンズの作品は、『ピクウィック・ペイパーズ』、『骨董屋』、『リトル・ドリット』の三作品で(全てロード・ノヴェルの体裁を取る)、それぞれが一つの章を構成している。著者によれば、それぞれが交通システムの新しい局面に対応して物語が構築されている。『ピクウィック・ペイパーズ』では完成したばかりの交通ネットワークを舞台にした駅馬車冒険物語の様相が、『骨董屋』では成熟していく交通システムの限界、悲劇的な状況が、『リトル・ドリット』では交通ネットワークの国際的な拡大という新しい位相が論じられている。この交通システムの核心とは、馬車の高速化に伴う時間と空間の歪みが生み出す新しい共同体の出現である。この新しい共同体にそれぞれの小説世界の物語構造(特に、マルチ・プロットの構造)が重ね合わされていく作業が本書の分析過程だと言って良いだろう。それ故、著者も述べているように、ナラトロジー分析が本書の基層を形成している。では、以下それぞれの章を簡潔に(そして幾分恣意的に)纏める。

第1章は『ピクウィック・ペイパーズ』である。著者は繰り返し交通革命が時間と空間を再構築し、新しい共同体を形成したことを指摘する。『ピクウィック・ペイパーズ』において、交通システムによる空間の標準化を端的に表しているのが、50章に掲載されている「ボブ・ソーヤー氏の旅の流儀」という挿絵である。ボブを含むピクウィック一行が貸馬車に乗ってバーミンガムを目指して疾走している場面であるが、まずはたなびく旗が馬車の高速を、そして屋上席の酒瓶片手のボブのゆとりが馬車の安定を表している。また、絵中段のピクウィックの馬車、絵上段のすれ違おうとしている客を満載した駅馬車、そして絵下段の馬車を追いかける貧しい子供たちが、三層の構造を形成し、彼ら全員の楽しそうな様子が新しい交通システムを祝福しているかのように見える。つまり、空間の標準化が本来異なる世界に生きていた人々を結びつけ、従来になかった新しい共同体を生み出したのであり、貧民までもが交通ネットワークの一部に組み入れられていることをこの絵は表している。

一方、時間の標準化は、駅伝していく馬車とその延長線上にある各駅を発着していく鉄道にとって必要不可欠なもので、まずはロンドン時間(聖ポール大聖堂の時計が基準)、そしてグリニッジ時間の中に各地方時間は纏められていった。この交通システムが生み出した時間の均質化は、やはり遠く離れている地域、人々を結びつけ、新たな共同体の形成に貢献していると言える。筆者は、月刊分冊という新しい出版形式で書かれた『ピクウィック・ペイパーズ』という小説の

様態にこの新しい共同体の発生を読み込んでいる。すなわち、月刊分冊という毎月配本されていく新しい形式は、正しく駆伝していく馬車の旅のアナロジーとしてとらえることができ(また、物語も馬車旅行が主題となっているのだが)、月刊分冊形式が新しい読者の共同体を作り出していると結論する。

このような交通システムと小説との橋渡しは、第1章の後半において、一層精緻に展開されている。郵便馬車と書簡体小説の相似的關係が鮮やかな議論の中に詳説されているが、両者の衰微を『ピクウィック・ペイパーズ』において見ることができると言う。郵便馬車は18世紀において最速の乗り物であり、郵便だけでなく人も運んでいたが(因みに、『イタリア紀行』として結実するイタリア旅行の際、ゲートが郵便馬車を使ったことが想起される)、交通革命、郵便改革を通じて、交通と郵便は分化していく。交通も郵便もどちらも人と人を結ぶコミュニケーションの手段であるが、前者は直接的、後者は間接的な手段である。そして、この人を運ぶシステムと郵便を運ぶシステムの再度の混合を伝えているのが、ピクウィックのパーミンガムへの旅である。ウインクルの手紙を彼の父親に届けるというピクウィックのこの旅の使命は、コミュニケーションの無意味な重複、つまり、機能的に全く無意味な二つのシステムの奇妙な混合の様相が認められる。結局、この手紙の配達是不調に終わり、返事を得ることはできない。しかも、後日果たされるウインクルの父の返事は、手紙ではなく、自らの「生きている身体」を運ぶという交通システムの媒介が選択されているのである。この二つのシステムは、“living body”と“dead letter”(配達不能郵便)という見事な比喩表現の中に収斂されているのだが、勿論交通ネットワークの優勢と郵便コミュニケーションの機能不全が含意されている。その他、この小説には、サム・メアリへのヴァレンタイン・カード、ピクウィックのバーデル夫人へのメモ(裁判ではラブレターと見なされる)、トニー・ウェラーの妻の死を知らせる不可解なサムへの手紙が登場するが、全て本来のコミュニケーションの正しい役割を果たすに至っていない。つまり、『ピクウィック・ペイパーズ』は、リチャードソンへの訣別、反書簡体小説であると結論する。

第2章は『骨董屋』である。『ピクウィック・ペイパーズ』が交通ネットワークの光だとすれば、『骨董屋』は交通ネットワークの影ということになる。著者によれば、交通システムが生み出したネットワーク共同体はその内に限界と過誤を作り出し、ディケンズはこのネットワークの負を『骨董屋』に組み入れたのである。この影を担うのがネルであり、彼女と祖父の孤独な徒歩旅行は、ネットワークからの完全な排除を意味する。この排除は、ネルと祖父が徒歩の旅を開始したその時に始まるのであり、同時にこの小説のプロットが二つに分化した瞬間でもある。このマルチ・プロット小説の内訳は、ネットワークの中に存在するロ

ンドン・グループのプロット (このグループの中にも複数のプロットが存在し、ネットワークの中でプロット同士が絡み合っている) とネットワークから分離した単体のネルのプロットである。この二つのプロットを架橋する試み、或いはネルのプロットを本筋のプロット (ネットワーク共同体) に再統合する試みを行うのが、物語途中で参入してくる「独身紳士」である。「独身紳士」はネルの探索を二度試みるが (探索自体も馬車の旅である)、何れも失敗に終わる。ある意味で、ネルの悲劇はネットワークが生み出した悲劇なのである (共同体というシステムが本来孕み持つ排除の構造を映していると言えるのではないか)。

第2章の後半では、『マスター・ハンフリーの時計』の中の物語である『骨董屋』の複雑な語りの問題が取り上げられているが、交通革命との関連で最も興味深いのは、最後の議論である。著者によれば、『骨董屋』には結末が二つある。一つは、本来の結末の『骨董屋』最終章である。もう一つは、『骨董屋』という物語の語り手であるマスター・ハンフリーが物語を読み終わった後に与えるもう一つの結末である。前者では、全知の語り手が登場人物たちの行く末を正に全知的に伝え、一方、後者では、『骨董屋』の原稿を読み終わったマスター・ハンフリーが新たな情報 (作中の「独身紳士」の正体は自分自身だというもの) を伝え、聖ポール大聖堂についての逸話で締め括る。問題は、一見無関連に見える聖ポール大聖堂についての逸話である。マスター・ハンフリーが原稿を自分の置き時計の中に収め、時を告げる鐘が聖ポール大聖堂の時計の鐘と重なり、聖ポール大聖堂に関する空想を開陳する、という連関を辿る。その空想とは、マスター・ハンフリーが聖ポール大聖堂の時計台へ登攀し、「ロンドンの心臓」たるその時計が下界の様々な人々の様子を見守る俯瞰的全知の視点に同化するというものである。前述したように、聖ポール大聖堂の時計は、交通ネットワークを支える統一された時間の基準となるロンドン時間を提供する大本であり、言わば様々な人々を包括するネットワーク共同体を束ねているとも言える。かくして、聖ポール大聖堂の時計と全知の眼差しは、交通ネットワークの観点を介して、見事に暗合する。

最後の第3章では、『リトル・ドリット』に見られる交通ネットワークの国際的な広がりの様相とこの物語の複雑に絡み合う複数のプロットとの関係が緻密に論じられている。まず、『リトル・ドリット』に登場する全ての人々が「旅仲間」(第2章のタイトルでもある) として、国、地域を越えて共有化された時間 (グリニッジ時間) によって束ねられていると言う。但し、第2章の「旅仲間」を束ねる共有化された時間は所与のものとして提示されている訳ではなく、この物語の冒頭を彩るマルセイユを照らす強烈な太陽との交代劇を経て登場する仕掛けとなっている。つまり、太陽は、太古より時間 (ローカル時間) を規定する源であり、古い時間の象徴である。また、この古い時間から新しい時間への移行は、国

内的環境 (ローカル時間) から国際的環境 (グリニッジ時間) への移行と言い換えることができる。その意味では、この移行は時間だけでなく、言語の面でも見られる。例えば、外国でも英語以外を話そうとしないミーグルズ (「英語が世界の母語」) とカヴァレットとコミュニケーションを取るために、イタリア語風の英語を駆使するプローニッシュ夫人とを対照させることができる。著者によれば、ミーグルズは国際理解を阻害する障壁を象徴し、プローニッシュ夫人はその障壁の克服の大きな意義を表している。(言語の問題は、「共有化された空間」の変異と言えるかもしれない。)

第3章の後半では、(例によって) 国際的ネットワーク共同体にこの物語の錯綜した複数のプロットが入念に編み込まれていく。まず前提として、国際的共同体における複雑な相互的な関係性と『リトル・ドリット』の纏れ合った幾筋ものプロットとの間のアナロジーが認められる。特筆すべきは、複雑なネットワーク内の相互関係の程度が個人の把握できる能力を越えているという点である。著者によれば、『リトル・ドリット』には、ミス・ウェイドを中心とした「ロマンティック・プロット」とクレナム家に纏わる「鍵の掛かった箱プロット」の二つのプロットが織り合わされている。この二つのプロットは互いに懸隔しているわけではなく、複雑に絡み合っている。例えば、リゴーはこの二つのプロットを自在に渡り歩き、複雑な相互関係を増幅させている (コスモポリタンたるリゴーの面目躍如である)。このような錯綜した相互関係の中で、個人は自らの関係性を把握することができず、例えばアーサー・クレナムは、クレナム家と何らかの関わりを持つリゴーの存在を理解することができない。そして読者も理解できないのである。『リトル・ドリット』の旅仲間、そして読者は仲間との相互の関係を全て知ることはなく、また知るためには現在の視点では不十分で、将来の視点が必要なのである。結局、第2章のミス・ウェイドの旅仲間への不可思議な言葉、「私たちは、見知らぬ場所から、見知らぬ道を通して会いに来る人たちと会うことになるでしょう」は、正に予言的に、そして全知的に、国際的ネットワーク共同体の有り様を述べているのである。

本書にはあえて触れられてはいないが、交通システムの生み出した新しい共同体は、やはりヴィクトリア朝大衆社会の基盤となるものであろう。大衆社会の成立には、概してジャーナリズムの発達という要因が挙げられるが、ジャーナリズムの発達も実は交通システムに支えられているのである (本書にも、ジャーナリスト時代のディケンズが最新鋭の駅馬車を駆使して、ロンドンからマンチェスターやエディンバラへと飛び回っていた様子が紹介されている)。その意味でも、交通ネットワークは近代大衆社会ネットワークの正しくインフラストラクチャーの役割を果たしていたと考えることができる。また、交通ネットワークの生み出

した新しい共同体の状況は、そのまま現代のさらに更新されたネットワーク社会にもそのまま当てはまるのではないだろうか。ただ、社会に張り巡らされたネットワークと言えば、フーコーやD・A・ミラーの説くパノプティコン型近代権力の様態を想起させるが、著者のこの考えへの態度は冷淡である（「いつも同じ結論だ」）。著者のネットワークへの態度はどこか楽観的のように感じられる。その点が、悲観的な評者にとっては、不満に感じるところである。